

あいさつ

奄美市教育委員会教育長 向 美芳



奄美市立宇宿小学校は、平成15年度から鹿児島県総合教育センターの研究提携校として、共に学び合いながら、問題を追及し、主体的に解決を図ろうとする子供の育成を目指した「複式学習指導」の研究・実践を重ねております。

本校のこれまでの研究は、大島地区だけでなく、複式学級を有する学校が大きな割合を占める本県の教育の発展に大きく寄与するものであると考えます。

本校では、令和3年度から令和4年度にかけて、「自ら学び自ら考える子供の育成」を研究主題に、「主体的に学習に取り組む姿」に焦点を当てて国語科と算数科の研究に取り組み、子供たちは課題解決のために主体的に学習を進められるようになったり、教師は必要に応じて柔軟に個別指導が行いやくなったりするなどの成果を得ることができました。また、令和5年度は「複式学級における個別最適な学びと協働的な学び」を研究主題に実践を行い、同時導入・同時終末を生かした学習過程を行うことで、教師がファシリテーターの役割を担い、子供たちが学習の方法を選択するなど、より主体的な学習につなげることができました。

本年度からは、子供の実態を把握し、昨年度までの研究の成果や課題を生かしながら、「複式学級における学習者主体の授業の創造～自ら学びを調整しようとする子供を育てる国語科授業～」を研究主題に設定し、国語科に特化して研究を進めています。

本研究では、自ら学びを調整しようとする子供を育てるために、「異学年協同の言語活動の設定」「活用・探究場面におけるめあてに変わる活動目標『マイチャレ』の活用」「単元の活用・探究場面での学習過程の確立」という3つの視点を設定して実践を行い、子供の姿を基に見出した課題を修正しながら全校体制で取り組んでいます。

これからの社会は、急速なテクノロジーの発展によりSociety5.0の時代が到来し、社会構造が急速に変化するために、未来予測が困難になると言われています。

このような時代では、他者から与えられた課題について、他者から与えられた計画を基に解決するのではなく、自ら課題を見出し、自分で解決の方法を調整しながら、他者と協働的に解決していくことが求められています。

本校の研究は、自らの学びを振り返りながら課題を発見し、学び方を選択・決定するなど、学びを自己調整しながら解決する子供の姿を目指すものです。このような子供の姿は、本県が目指す教師主導型から脱却し、必要に応じて個別最適な学びと協働的な学びを行なうながら自らが見出した課題を解決する「学習者主体の授業」を目指す姿であると言えると考えます。そして、このような学びを繰り返すことで、子供たちは、これから訪れる予測困難な時代を生き抜く資質・能力を身に付けていくと考えます。

また、本研究が、今回の公開を通して、本校だけでなく、本市の複式学級を有する全ての学校の複式学習指導に有効に活用され、子供たちが自ら課題を発見し、学びを調整しながら解決する学習を繰り返し体験することで、これからの時代に必要な資質・能力を身に付けることを願っております。そして、このことが、奄美の子供たちを光にすることにつながるものになると考えます。

最後になりましたが、これまで研究の推進に一体となって取り組まれた宇宿小学校の教職員の皆様、御指導・御助言を賜りました鹿児島県総合教育センター、大島教育事務所、並びに関係各位に心から感謝を申し上げ、あいさつといたします。

あ い さ つ

鹿児島県総合教育センター所長 永田 孝哉



これからの学校教育には、時代の変化を前向きに捉え、次のステージへと進んでいくために、学習観・授業観・研修観など学校における「観」の転換が求められています。これまでの学校教育は、学校の指導方針や教師の指導スタイル、学校で共通理解された授業のフレームにおいて、すべての子供たちを適合させ育成しようとしてきましたが、これからは子供たち一人一人が自己調整を重ね、自らを成長させていく力を育むことができる教育へ進んでいく必要があると、私たちは認識しています。そして、現在、これまでの学校教育の在り方を問い直し、学校教育に携わる者すべてが一丸となって、魅力ある学校づくり・学習者主体の授業・生徒指導提要に基づく発達支持的生徒指導・特別支援教育の充実など様々な実践に取り組んでいるところです。

本県の第4期教育振興基本計画の基本目標には、「夢や希望を実現し、ともに未来を創る鹿児島の人づくり～誰もが幸せや豊かさを感じられる地域や社会を目指して～」が示されました。その中の具体的な人間像の一節に「主体的に考え方行動する力を備え、そのよさや持てる力を發揮し、多様な人々と協働しながら未来的社会の創り手となる人間の育成」とあります。このことを踏まえ、私たちは、これまでの価値観にこだわることなく、多様性・包摂性を大事にしながら一人一人が時代の当事者として共にウェルビーイングの向上を目指して生きていく必要があります。

奄美市立宇宿小学校では、「複式学級における学習者主体の授業の創造」を研究主題に据えて、異学年で学び合いながら自ら学びを調整し学び続ける子供の育成を目指しています。1年次となる今年度は、異学年で学び合うよさを生かした言語活動の設定や自己調整を促す「マイチャレシート」の活用、習得・活用場面において主体的な学習を進めるための学習過程の工夫などを行い、複式学級における国語科の学習者主体の授業づくりに取り組んでいます。こうした取組により、子供たちは学年を越えて学び合い、共に成長していく自分を実感し、更に次の学びへとつなげていくことができます。このような複式学級のよさを生かした学びを通して、自分の中で自分の学びを育てながら自己更新を繰り返していく子供へ育っていきます。その先に、これからの時代を生きるためのマインドのバージョンアップと実践・実行のアップデートを繰り返しながら、常に自分の取組を問い合わせる意識と新たな価値を生み出すエージェンシーを兼ね備えた人間へと成長することが期待できます。

最後に、当センターの研究提携事業に対する御理解と御支援をいただいております奄美市教育委員会並びに大島教育事務所、保護者・地域の皆様、本日の公開研究会を迎えるに当たり、児童と共に真摯に研究を継続してこられました校長先生をはじめとする宇宿小学校教職員の皆様に深く敬意と感謝の意を表し、挨拶といたします。

あいさつ

奄美市立宇宿小学校長 前里 いずみ



本校は、平成15年度から鹿児島県総合教育センターの研究提携校として、年度ごとに研究教科を設定し、より望ましい複式学習指導の在り方に関する研究・実践に取り組んでまいりました。昨年度は「複式学級における個別最適な学びと協働的な学び」を研究主題に実践を行い、同時導入・同時終末を生かした学習過程を行うことで、教師がファシリテーターの役割を担い、子供たちが学習の方法を選択するなど、より主体的な学習につなげることができました。

本年度からは、これまでの研究の成果や課題を生かしながら、「複式学級における学習者主体の授業の創造～自ら学びを調整しようとする子供を育てる国語科授業～」を研究主題に設定し、2年間の研究を進めています。

複式学級における学習者主体の学習は、子供たちにとって楽しく、学習へのモチベーションを高める効果があります。教師が設定した範囲内ではありますが、自分が選んだ課題に自分の好きなやり方で取り組めるため、「学ぶ楽しさ」が増します。その結果、主体的学習が強化され、学びの質が向上し、自分に合う学び方やペースを把握し調整できるようになります。「このように学習すれば、自分で分かるようになる」という達成感は自己肯定感を高めます。他の教科や活動、学校生活のいろいろな場面でも応用することによって、自分自身の学習を管理する能力も養われ、困難に直面したときでも主体的に問題を解決しようとする姿勢が育まれていきます。一方、研究を進める中、「子供に任せると遅れるのではないか」「間違って理解してしまうのではないか」という不安の声も聞かれました。実践を重ねるにつれ、「どこでどんなふうにつまずいているかを確認しやすくなった」「子供の豊かな発想に驚かされた」といった声も聞かれました。子供を信頼し、子供を学びの主体に置く教師側の意識改革が重要といえます。「何のために学ぶのか」という価値の追求が大事であり、子供一人一人の思考の仕方、学習スタイル、個性や生活経験、興味・関心に合った学びの方法を教師が創造することが学習者主体の学びの第一歩になると考えます。「どんな力を身に付けるのか」「身に付けた力をどう活用するのか」を念頭に授業をつくり、学習内容や学習方法を子供自身が振り返ります。活動目標「マイチャレ」を活用しながら見出した課題を修正していく力もついてきました。学習者主体の授業を教育課程全体に広げ、自分で情報を選択し、必要な知識を自分で学ぶ能力、自己学習能力をさらに育んでいきたいと考えています。

本日、これらの研究実践につきまして、その一端を授業とともに公開させていただきますが、内容につきましては、まだまだ研究の途中であり、多くの課題が残っています。本日御参加の先生方から忌憚のない御意見を賜り、本校の研究をさらに充実したものにするとともに、奄美市や鹿児島県の複式教育の充実につながる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本研究に温かい御指導と御助言をいただきました県総合教育センター、大島教育事務所、奄美市教育委員会の先生方、そして多大な御理解と御協力をもって支えてくださいましたPTA及び地域の方々へ心から感謝申し上げ、あいさつといたします。

1 研究主題

複式学級における学習者主体の授業の創造 ～自らの学びを調整しようとする子供を育てる国語科授業～

2 研究主題設定の理由

(1) 時代の要請（社会的背景）

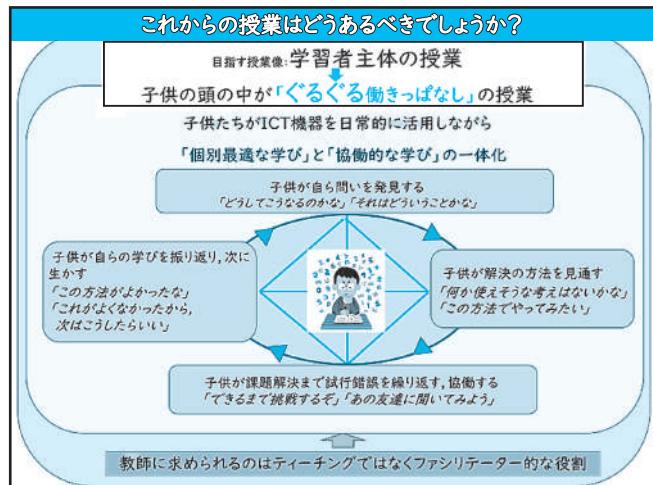
これからの中等教育は、クラウド上で様々なデータのやりとりができる、先端技術で開発されたAIを社会生活に取り入れたSociety5.0時代が到来しようとしている。このように、急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力として、学習指導要領前文には以下のように示されている。

一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようになることが求められる。

（小学校学習指導要領 前文）

また、令和5年3月に県教育委員会から示された「『学習者主体の授業』の提案」では、「主体的・対話的に深く学ぶ授業」の重要性が改めて示された。その提案では、学習者主体の授業を目指すために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることや、教師はファシリテーター的な役割を担っていくことが求められていると明記されている（資料1）。

のことから、あらゆる社会的変化に対応できるような子供を育てるための「学習者主体の授業」が求められていることがわかる。



【資料1 「学習者主体の授業」の提案 鹿児島県教育委員会（R5.3）】

(2) 学校教育目標

本校では、次のように学校教育目標、目指す子供像を設定し、授業改善に取り組んでいる。

学校教育目標	心豊かで <u>すすんで学び</u> たくましく生きる力を備えた宇宙っ子の育成
目指す子供像	<input type="radio"/> <u>自ら学び、自ら考える子供</u> <input type="radio"/> 礼儀正しく、誰とでも仲よくできる子供 <input type="radio"/> 体を鍛え、最後まで挑戦する子供

(3) これまでの研究から

本校は平成15年度から県総合教育センター研究提携校として複式学級における学習指導について研究・実践を行っている。令和3・4年度は「自ら学び自ら考える子供の育成」を主題に「主体的に学習に取り組む姿」に焦点をあてて算数科と国語科の研究に取り組んできた。研究では「複式学級のよさ」を生かし、本校における複式学級の授業設計を確立したことで、子供たちは自分たちで課題解決のために主体的な学習を進めることができるようになった。また、教師は、柔軟に両学年を渡りながら、必要に応じた個別指導を行いやすくなった（資料2）。

複式学級のよさ

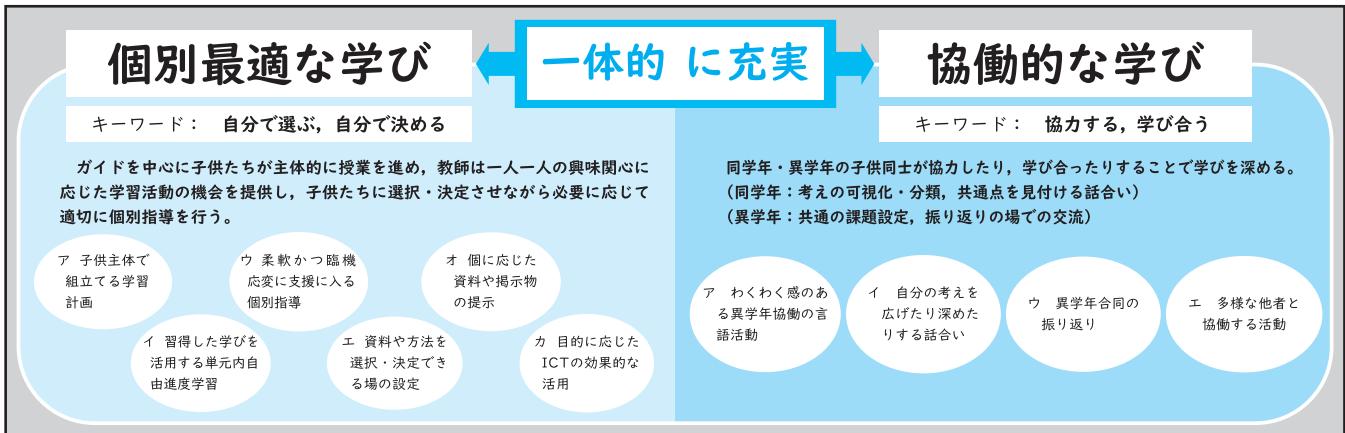
- 友達のことを深く知っている。
- 異学年が一つの教室で学ぶ。
- 自分たちで学びを広げたり深めたりする。
- どの子も主役になれる。

本校における複式学級の授業設計

- 同時導入・同時終末による「ずらし」なしの学習過程
- 異学年共通の課題設定
- 授業の組み立て方のパターン化

【資料2 「複式学級のよさ」「本校における複式学級の授業設計」(R4までの研究)】

令和5年度は学習面・指導面における研究の課題から、令和4年度に引き続き国語科の研究を継続し、「複式学級における個別最適な学びと協働的な学び」の研究・実践を行ってきた(資料3)。



【資料3 複式学級における「個別最適な学び」と「協働的な学び」(R5宇宿小学校研究公開 リーフレット)】

同時導入・同時終末による「ずらし」を極力減らした学習過程で行うことで、教師がファシリテーター、コーディネーターの役割を担うことができたり、子供たちに学習の方法を選択・決定させたりすることができ、より主体的な学習につなげることができた。

令和6年度も、複式学級のよさを生かし、自分たちで学びを広げたり深めたりできる取組を継続して行うこととした。

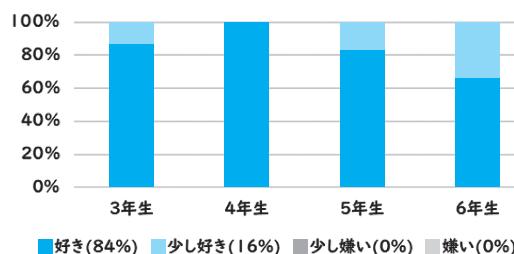
(4) 子供の実態から(令和6年4月12日, 3~6年生25人)

ア 分析

(ア) 複式学級における学び方

〈ガイド学習について〉

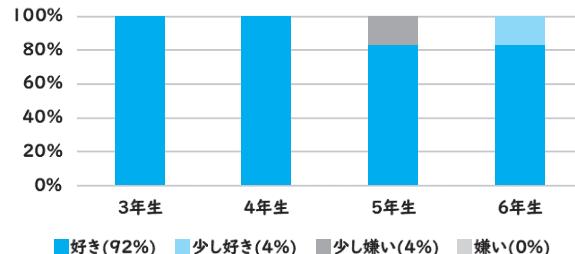
ガイド学習は好きですか



【資料4 ガイド学習について R6.4 自校作成による質問紙(1・2年生未実施)】

〈単元内自由進度学習について〉

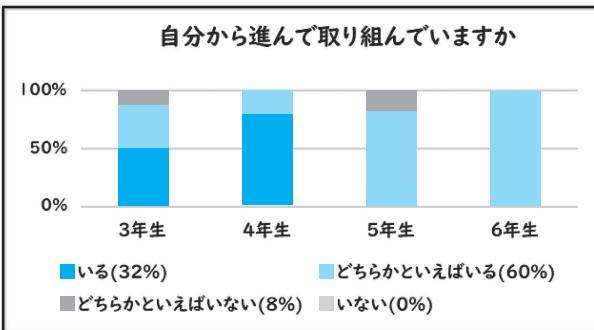
単元内自由進度学習は好きですか



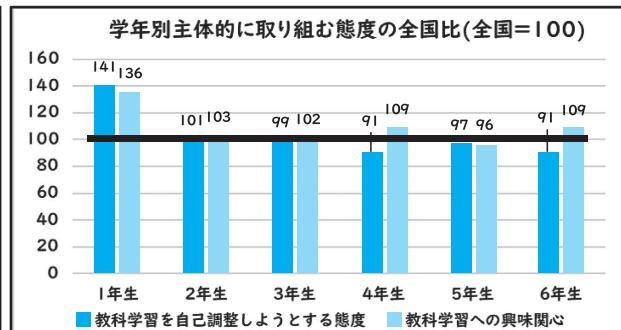
【資料5 単元内自由進度学習について R6.4 自校作成による質問紙(1・2年生未実施)】

質問項目「ガイド学習は好きですか」に対し、全員が「好き」または「少し好き」と回答した(資料4)。理由として、「自分たちだけで進めるから楽しい」、「自分たちでできると自信がつく」などが挙げられたことから、ただ好きなだけでなく、自信をもって活動できていることが分かる。また、質問項目「単元内自由進度学習は好きですか。」に対し、92%の子供が「好き」と答えた(資料5)。一人だけ「少し嫌い」と答えた子供がいたが、理由が「一人で進めることが不安になることがあるから」という理由であった。

(4) 国語科の学習



【資料6 主体的に取り組めているか R6.4 自校作成による質問紙(1・2年生未実施)】



【資料7 主体的に取り組む態度の全国比 R6.1 実施 CRT の結果】

質問項目「自分から進んで取り組んでいますか」に対し、どの学年もおおよそ主体的に取り組むことができていることが分かる。回答ごとに見ていくと、主体的に取り組むことができているという子供は中学年に数人いる程度で、高学年には一人もいないことが分かった（資料6）。

資料7より、主体的に取り組む態度の中でも「興味・関心」「自己調整力」の、結果を見てみると、「興味・関心」は全国平均を超えている学年がほとんどだが、「自己調整力」に関しては、上学年では低くなっていることが分かった。

イ 考察

複式学級における学び方においては、これまでの研究により国語科の学習の流れを確立したこと、ガイドを中心に行なうことで主体的に取り組むことができているという子供が多い。また、単元内自由進度学習に関しては、自分のペースで取り組むことによさを感じている子供が多い一方、一人で進めることに不安を感じている子供もいる。不安なまま学習が進むことで、主体的に取り組みにくくなることが考えられる。

国語科の学習において、主体的に取り組むことができている子供が多く、その要因としては「興味・関心」の高さからということが分かる。一方、自己調整力に関しては全国比を下回っている学年が多い結果から、自らの学びを調整しながら学習を進めていくことができていない状況にあると捉えた。つまり、自己調整力が低いことが課題として考えられる。

以上のことから、複式学級のよさを生かしながら、子供一人一人が自らの学びを調整しようとするとする子供を育てる国語科授業をデザインすることが必要だと考えた。

(5) 目指す子供像

以上のことから本研究では、研究主題及び副主題を下のように設定した。

複式学級における学習者主体の授業の創造 ～自らの学びを調整しようとする子供を育てる国語科授業～

また、目指す子供像として、

自らの学びを調整しながら学び続ける子供

とし、具体的な姿として以下の姿を設定した。

- 異学年同士で協力したり、学び合ったりしながら学習を進める子供
- 課題解決に向けて見通しをもって取り組む子供
- 自らの課題に対して粘り強く学び続ける子供
- 自分で立てた計画を調整しながら学習を進める子供

3 研究の概要

(1) 研究の視点

複式学級のよさを生かしながら、より学習者主体の授業が進めていくように、三つの研究の柱を立てて研究を進めることとした。

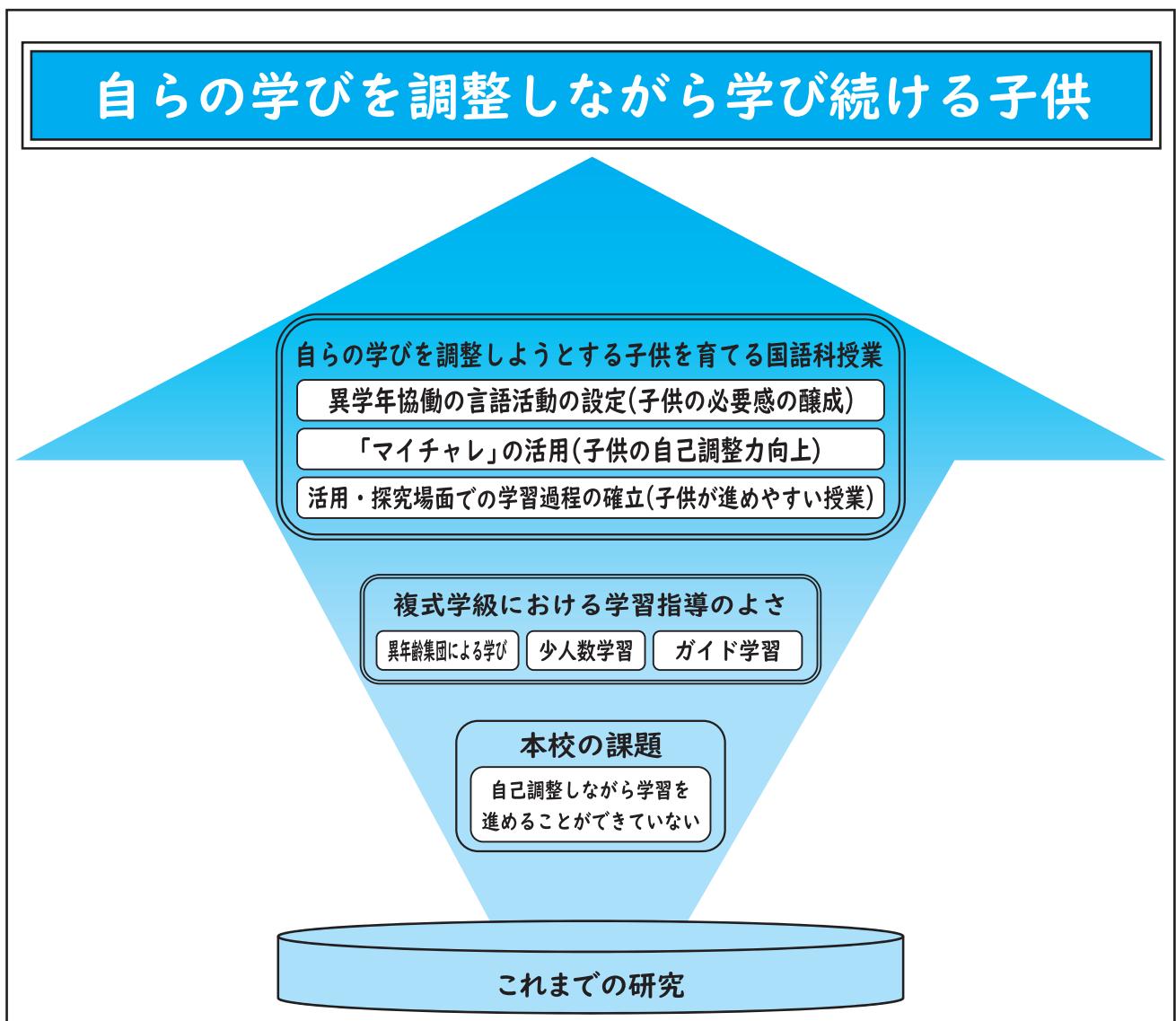
ア 異学年協働の言語活動の設定

- イ 活用・探究場面におけるめあてに代わる活動目標「マイチャレ」（以下「マイチャレ」と明記）の活用
- ウ 単元の活用・探究場面での学習過程の確立

(2) 研究の計画

自らの学びを調整しながら学び続ける姿が見られるように、本年度から2年間を見通して研究計画を立てた。1年次は、それぞれの研究内容を具体化・検証することに重きを置き、2年次は今年度の研究から出た課題を改善していくことや、複式学級における学習者主体の授業を構築する上で大事なポイントを他教科へ生かすことができないか考え、どの教科、どの領域でも学習者主体の授業が進められるよう、研究に取り組んでいく。

(3) 令和6年度 研究の構想図



4 研究の内容

(1) 研究主題の捉え方

ア 「複式学級における学習者主体の授業」とは

(ア) 「学習者主体の授業」とは

子供が自ら「問い合わせる」「解決の方法を見通す」「課題解決を図る」「自らの学びを振り返り、次に生かす」という活動を通して、各教科の「見方・考え方」を働かせながら資質・能力を身に付けていくこと。その際、「学習形態」や「道具」「学習時間」などを自己選択・自己決定しながら進めていくことと捉えている。

(イ) 「複式学級における学習者主体の授業」とは

異学年が同時に学習を進める複式学級では、学年別指導の授業形態として「ずらし」を用いた授業と、同時導入・同時終末により「ずらし」なしの授業がある。本校では、同時導入・同時終末を取り入れられる単元では、一単位時間の中に異学年で交流する振り返りの時間を確保しながら授業を進めてきた。

本年度は、「複式学級における学習者主体」の具体的な授業を

- 子供が異学年・同学年の子供と交流しながら選択・決定して学びを進めていく授業
- 子供が必要に応じて学び方や計画を調整しながら、よりよく学びを深めていく授業
- 教師が子供一人一人の学びが充実するよう、学習環境を整えていく授業

と捉えて研究を進めている。複式の特徴である「異年齢集団」のメリットを生かしながら異学年協働の言語活動を設定するなどして子供の学習への必要感を高め、学習者主体の学びへとつなげたい。

イ 「自らの学びを調整しようとする子供を育てる国語科授業」とは

本校では自らの学びを調整しようとする子供の姿を「学び方を調整する子供」、「計画を調整する子供」の二つの姿と捉える。これまでに研究を進めてきた「複式学級のよさ」を生かした授業設計を基に、自己調整しようとする子供を育てる国語科授業をデザインすることを通して、子供の自己調整力の向上を図る。また、本校では、国語科の単元全体の学習過程を四つに分け、以下のように捉え学習を進めている。

学習過程	具体的な活動	4年生教材「ごんぎつね」における活動
見通す	単元全体の流れの確認や学習計画を立てる。	「気持ちの変化に着目して読み、感想を書く」ための学習計画を立てる。
習得 (全体で)	その単元で身に付けたい知識・技能を習得する。	登場人物の「気持ちの変化の読み取り方」について知る。
活用・探究 (個人・グループで)	習得した知識・技能を活用しながら、言語活動に取り組む。	自分で選んだ本の登場人物の気持ちの変化をとらえ、感想を書く。
共有・振り返り	全体で共有し、単元全体の振り返りをする。	書いた感想を共有し、単元全体を振り返る。

単元の活用・探究場面では、「単元内自由進度学習」を取り入れることにより、子供たちが「めあて」に代わる個人やグループの活動目標(マイチャレ)を設定し、マイチャレに沿ってそれぞれのペースで活動したり、自分の計画を確認・調整したりすることができるようになっている。

(2) 研究の実際

ア 異学年協働の言語活動の設定

複式学級の特徴として、異学年が同じ教室で学習していることが挙げられる。その特徴を複式学級のよさとして生かすことができないかと考えた。そこで、まずは、単元を貫く言語意識として異学年協働の活動を設定し、その達成に向けて異学年で協力しながら学習を進めていくようにした。そうすることで、自然と異学年の協働が生まれ、より学習者主体の授業ができるようになってきた。以下が、異学年協働の言語活動の例である。

高学年

5年生：「みんなが使いやすいデザイン」

6年生：「デジタル機器と私たち」

異学年協働の言語活動

「最高の宇宿小にするぞ！」 ～今よりもっといい宇宿小になるためにこんな提案（報告書＋提案書）をします～

五年生が制作した「報告書」

体育倉庫の整理整頓をしてより良い学校へ

5年
6年

1 テーマを選んだ理由

ぼくは、外遊びが好きで昼休みなど体育倉庫の道具をよく使う。そのときに、体育倉庫が整理されていないことに気付いた。そこで体育倉庫の整理整頓についてくわしく調べてみることにした。

2 調べ方

まず、体育倉庫の実際の様子を見たり、写真にとったりする。次に、アンケートを作って各学年に送り、アンケートを集計する。この2つの方法で調べることにした。

3 調べて分かったこと

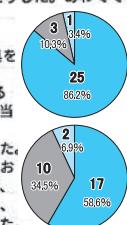
(1) 体育倉庫の様子

今、体育倉庫はボールがちゃんとなおされていなかったり、グローブが乱雑に置いてあったりした。あわててなおしていたのだと考えられる。

(2) アンケート結果

このグラフでは、25人が道具をおなしていると答えている。他の3人は、たまにおなしていると答えている。1人は道具を適當になおしていた。

次に道具のおおし方をたずねた。グラフでは、道具を投げずになおしている人が17人いる。だが、たまに投げている人が10人いて、投げてなおしている人が2人いた。



以上のことから次の2点を提案する。

4 提案

(1) 道具を直す場所に名札をはる

みんなが気持ちよく遊べるために、なおす場所を意識できる方法を僕たちは提案する。

昼休みのギリギリまで遊んでいて、教室に戻る時間にあわてて体育倉庫の道具を投げてなおし、きれいになおせないと考える。きちんと元の場所に戻し、自分からきれいなおそうと意識して取り組むことで、それが当たり前になってくると思う。

(2) 1ヶ月に1回体育倉庫の写真を撮る

1ヶ月に1回写真を撮って体育倉庫の様子を知らせることで、みんなが「ちゃんとなおしていなかったんだ」と気付き、次から気をつけようと心がけてくれると考える。

六年生が制作した「提案書」

宇宿小学校をよりよくするために、提案書を5・6年生で協働して作成し、校長先生・教頭先生に提案した。

中学年

3年生：「仕事のくふう、みつけたよ」

4年生：「新聞を作ろう」

異学年協働の言語活動

新発見！宇宿小学校のみりょく ～宇宿新聞社の記者になって、節田小学校の人たちに伝えよう～

三年生が制作した「報告する文章」

宇宿小いねすりおどりのひみつ

1. 調べたきっかけや理由

宇宿小学校では、運動会や音楽発表会で「いねすりおどり」を踊ります。僕は、何でいねすりおどりができたかが気になったので、調べることにしました。



2. 調べ方

いねすりおどりのことについて知っている人にインタビューしたり、いねすりの写真を使って調べました。

3. 調べて分かったこと

(1) がっさかがいぱい

いねすりおどりでは、たいこ・しゃみせん・うた・ゆびぶえ・ざる・ばら・ひも・きね・うすなどたくさんのがっさや道具を使います。

(2) 豊作へのかんしゃの気持ちをこめたおどり

いねすりおどりは、古い時代の女性たちの生活的一面と、いねのだっこく・もみすり・せいまいなどの一連の動きをおどりに取り込んだもので、豊作にかんしゃするおどりだということがわかりました。

4.まとめ

ぼくがしたことがあるのは「ひも」です。豊作にかんしゃするおどりだとわかったので、かんしゃの気持ちをもちながらおどりたいと思いました。これからも、いねすりおどりの文化をだいじにしていきたいです。

宇宿の歴史について

歴史新聞

6月21日



四年生が制作した「新聞」

宇宿小学校の魅力を他校の友達に伝えるために、壁新聞を協働して作成し、近隣の学校へ送った。

低学年

1年生：「いいこといっぱい！年生」

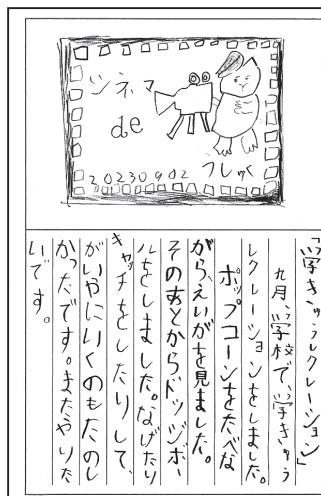
2年生：「すてきなところをつたえよう」

異学年協働の言語活動

にゅうがく まってるね！

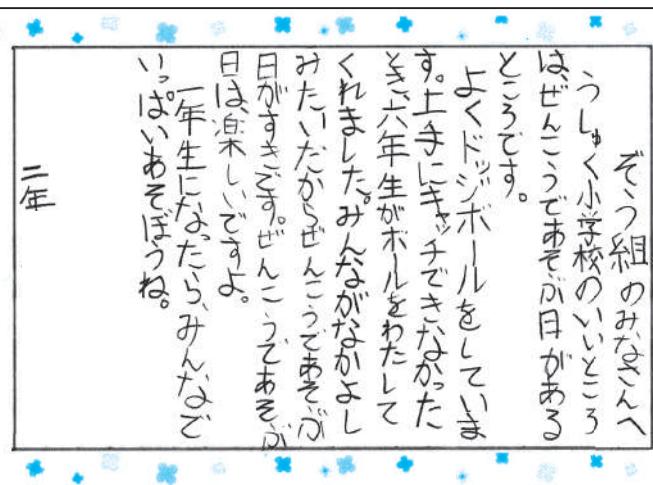
～しんいちねんせいに にゅうがくがたのしみになるような がっこうしょうかいをしよう～

一年生が制作した「絵日記」



宇宿小学校への入学が楽しみになるように、手紙と絵日記を作成し、年長児に紹介した。

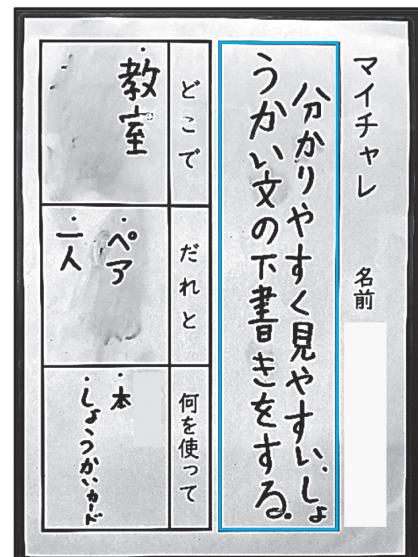
二年生が制作した「手紙」



イ 「マイチャレ」の活用

異学年協働の言語活動を設定することで、単元の活用場面では「個」や「ペア」で学習を進めることが多くなり、全体でめあてを立てることがなくなってきた。そこで、習得の時間における「めあて」に代わるものとして、活用・探究の単元内自由進度学習の時間には「マイチャレ」を取り入れている。授業の導入時に、その時間に達成したい目標や、解決したい疑問等をそれぞれ個人で考え、「マイチャレシート」を活用して本時の活動目標を立てることとした。自分で立てた単元内自由進度学習の計画を基に、本時での自分の活動目標を自己決定し、シートに記入した。その際、「どんな場で活動するか」

「誰と活動するか」「どんなツールを使うか」という学



【マイチャレシート】

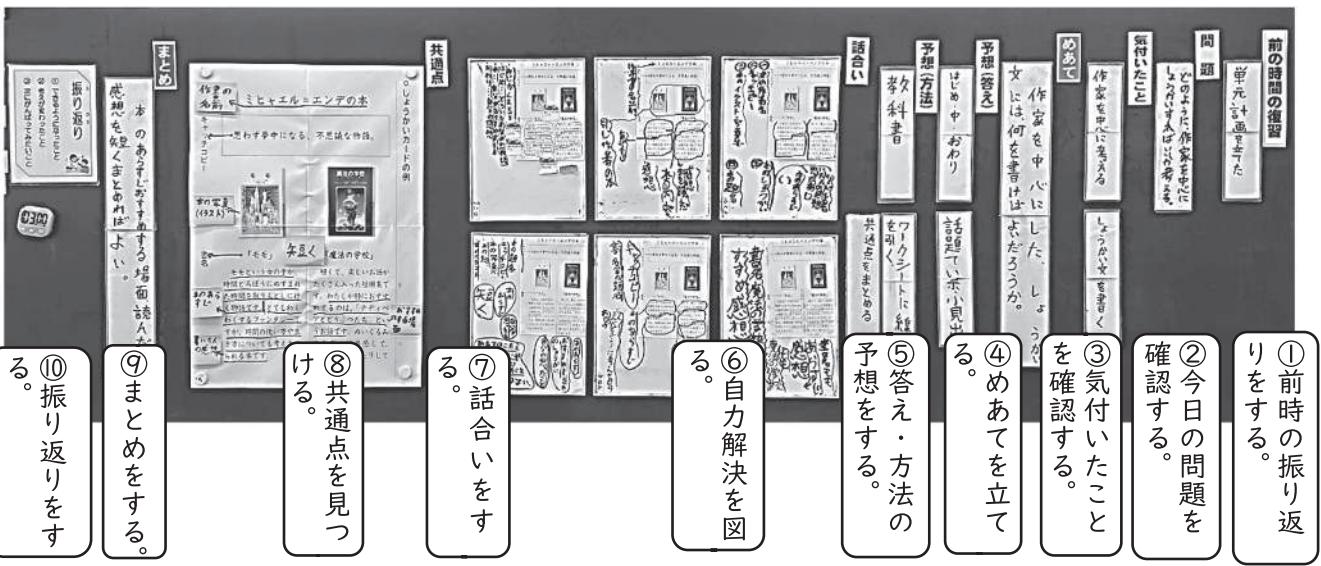
び方について自己選択することで、個に応じた学習や、ペア・グループでの協働的な学習を進められるようにした。また、授業の終末には、「マイチャレ」について個人やペア・グループで振り返りをすることで、今後の見通しについて考え、計画を見直し、自己調整ができるようにした。

ウ 単元の活用・探究場面での学習過程の確立

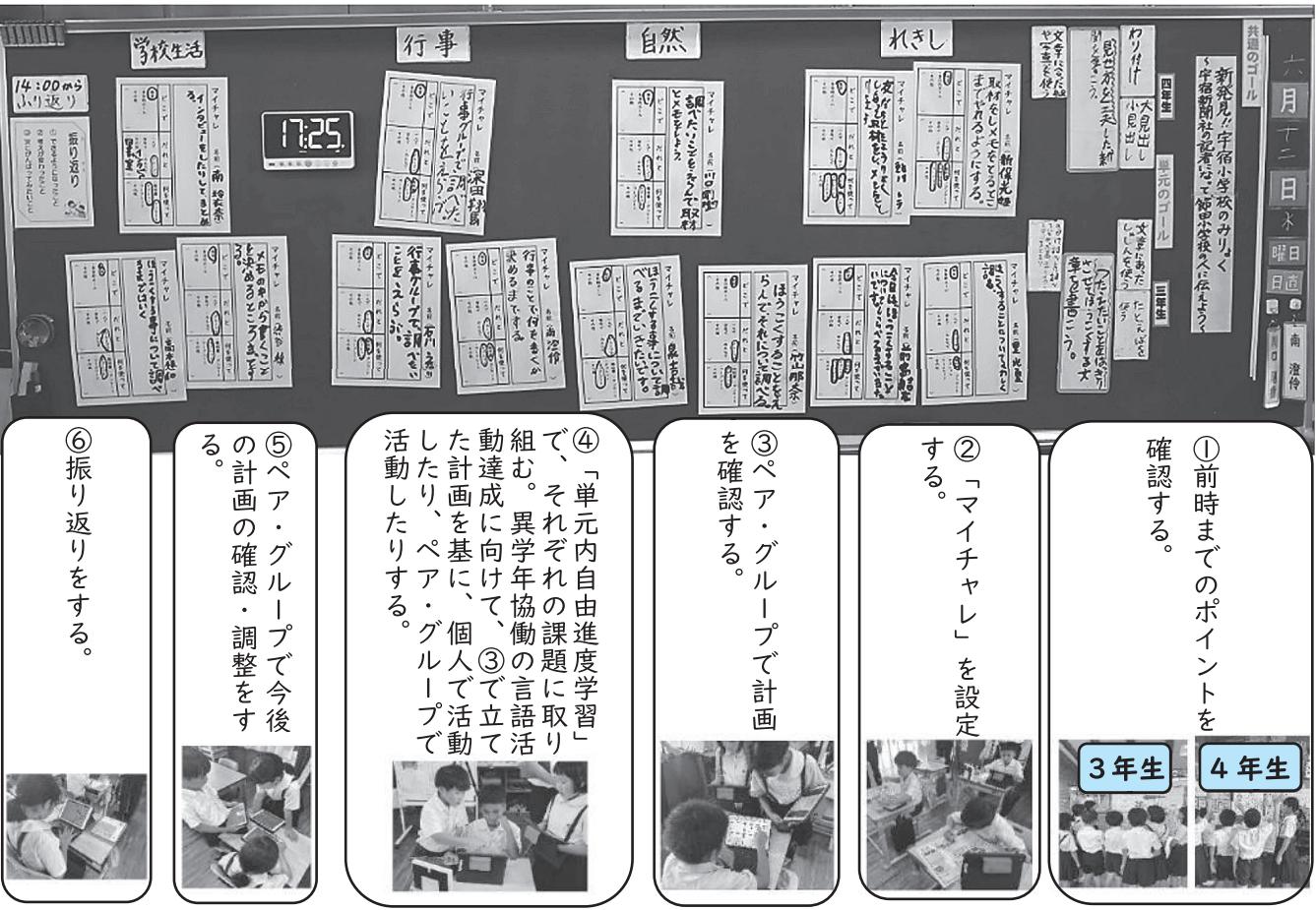
昨年度まで、子供が1単位時間における「ずらしなしのガイド学習」をどの教科でも同じ流れで進めていくように研究に取り組んできた。その成果の一つとして、子供たちが戸惑うことなく、学習者主体の授業を進めていくことができる教科が増えってきた。しかし、国語科の学習での活用・探究場面になると、習得場面と同じ流れで進めることが難しく、子供たちが進め

方に戸惑いを感じる場面が出てきた。そこで、習得場面での学習過程を生かしながら、活用・探究場面での学習過程を新たに設定し、より学習者主体の学習が進められるようにした。

習得場面の学習過程



活用・探究場面の学習過程

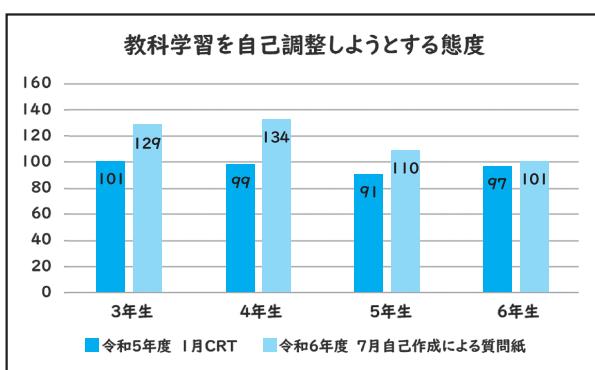


5 研究のまとめ

(1) 研究の視点から

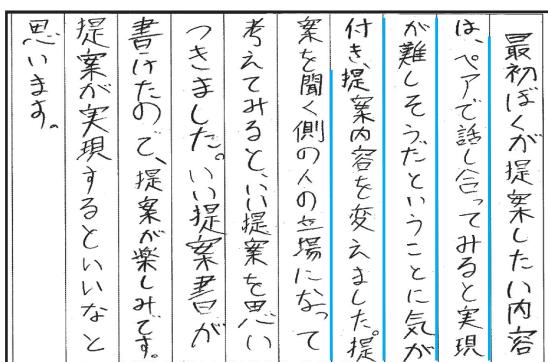
	成 果	課 題
異学年協働の言語活動の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ 必要感をもって取り組むことができたり、達成感を味わうことができたりし、より意欲的に活動できるようになってきた。 ○ 両学年同時に授業を進めることができ、担任が個別指導に入りやすくなつた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 异学年協働で一つのものを仕上げるには、時間が足りなくなることもあつた。 ● 習得の時間でしっかりと知識・技能の定着ができるいないと、計画を立てても思うように進まない子供がいた。
「マイチャレ」の活用	<ul style="list-style-type: none"> ○ 見通しをもって本時の活動に取り組み、終わらなかつた部分を家庭学習で取り組むなど、自分で計画を調整しながら学ぶことができるようになつた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「マイチャレ」の内容が学び方でなく、学習の進度だけに偏つたものになつていることもあつた。
単元の活用・探究場面での学習過程の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習過程を確立したことで、単元の活用・探究場面においても、より学習者主体の学習が進められるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 計画・調整に時間がかかり、1単位時間の活動時間が少なくなつてしまうときがあつた。

(2) 子供の姿から(アンケート・単元終末の子供の振り返り)



【資料8 慮度の比較 R0.1実施CRT R0.7実施自校作成による質問紙(1・2年生未実施)】

1月に実施したCRTの主体的に学習に取り組む態度に関する質問の中で、「教科学習を自己調整しようとする態度」に着目し、同じ内容の質問を7月に実施した。その結果、前年度1月のCRT全国比を100として比べると、どの学年も「自己調整しようとする態度」が向上したことが分かる。このことからも、「自らの学びを調整しながら学び続ける子供」の育成が图れつつあると考える(資料8)。

【資料9 単元の終末の子供の振り返り】

資料9は、単元の終末の子供の振り返りである。異学年のペアでの話合いを通して、提案内容が「実現可能ではない」ことに気付き、提案内容を変更した子供のものである。さらに提案を聞く側の立場になって考え方直すなど、自分たちで相手意識を明確にした様子が伺える。まさに、自らの学びを調整し、課題解決に向けて学び続けた姿だと言える。


【作成した提案書を、校長先生と教頭先生に提出している様子】

(3) 次年度に向けて

これまでの研究を核に、より主体的に取り組むことができるようにするためにはどうすればよいかを考えた今回の研究で、単元を通して目標をもち、自らの学びを調整しながら学び続ける子供の姿がたくさん見られるようになつた。特に、「マイチャレ」については、内容や様式等を検討していきながら、今後も継続していきたい。また、国語科を中心とした研究してきた内容を、他教科、他領域へと広げ、実践・検証を続けていくことが大事だと考えている。今後も、複式学級における学習者主体の授業の創造に励んでいきたい。